

九州支部

いたが、平成13年5月、Hb 6.3 g/dlと高度貧血が認められた。骨髓生検にて赤芽球癆と診断されたが、胸腺腫以外の原因が見つかっていない。

64. 急速な進行を呈した胸壁腫瘍の1例

北九州市立医療センター呼吸器内科

鬼塚じゅん、尾崎真一、川崎雅之

症例は52歳、男性。平成13年6月中旬脳膿瘍に対する手術を行った。その経過中、胸部レントゲン写真右上肺に増大する腫瘍影が出現、肺膿瘍が疑われ8月14日当科初診、入院となった。入院後エコー下生検を行い、組織型不明の悪性細胞が検出された。腫瘍影は急速に増大し、大量の胸水が出現したため、確定診断をつける目的で9月6日当院呼吸器外科で腫瘍摘出術を行った。病理診断では低分化の悪性新生物であり、胸膜中皮腫、PNET等が疑われたが各種特殊染色でも確定診断は得られなかった。その後CBDCA (AUC5) /VP-16 (100 mg/m²) 2コース、TXL (45 mg/m²) 1コースによる化学療法、放射線療法の追加治療を行ったが、原発巣の増大、胸腔内転移、胸水の増加を認め、PDと判定、平成14年3月21日死亡された。急速に増大する胸壁腫瘍の症例を剖検所見も合わせ報告する。

65. いわゆる肺癌肉腫の1例

国立嬉野病院外科

本庄誠司、久野 博、飛永修一

島 義勝、新海清人、木田晴海

肺癌肉腫は上皮成分と非上皮成分よりなる腫瘍である。今回その1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。症例は77歳の男性、1999年6月右上肺野に腫瘍影が見つかった。その後発熱と急速な増大が出現、肺膿瘍も疑われたが、9月6日右上葉切除+リンパ節郭清を行った。病理診断の結果：腫瘍の大部分は紡錘形細胞よりなる線維組織様に見える肉腫で、一部に類円形の上皮系細胞も見られた。免疫染色では紡錘形細胞はvimentinが、類円形細胞ではkeratin, EMAがそれぞれ陽性であった。以上より肺癌肉腫と診断された。術後3ヶ月に放射

線治療中に左肺に再発が出現し、結局2000年4月癌死となった。

66. 再発時血気胸にて発症したAngiosarcomaの1例

久留米大学第1内科

川崎裕子、合原るみ、石松明子

一木昌郎、力丸 徹、相澤久道

同 第1外科

寺崎泰宏

高森信三、林 明宏

症例は71歳の男性。1年前に前額部の腫瘍を摘出しAngiosarcomaと診断された。約1ヶ月前より咳嗽出現。胸写上、血気胸疑われ当科入院。胸腔ドレーン挿入し呼吸困難は改善したが、血性排液とair leakが持続しブラ縫縮術を施行。その後もair leakが持続したため右肺全摘術を施行。一旦退院となるも呼吸困難と血痰出現し再入院。術後断端瘻が判明するも状態悪化し死亡された。剖検の結果、術後断端部、胸膜、心嚢などにAngiosarcomaの浸潤を認めた。Angiosarcomaは高率に胸膜直下に転移する事が知られているが、本邦での剖検例は約30例に過ぎない。文献的考察もふまえて報告する。

67. 高neuron-specific enolase血症を認めたmalignant lymphomaの1例

長崎大学第2内科

元石有香、鶴谷純司、中村洋一

北崎 健、中富克己、早田 宏

岡三喜男、河野 茂

同 病院病理部

林徳眞吉

同 原研病理

大谷 博

症例は65歳、女性。平成14年1月に呼吸困難と全身倦怠感を主訴に当科を受診した。胸部レントゲン写真およびCTにて両肺多発性の結節陰影と著明な縦隔リンパ節の腫脹を認めた。鑑別疾患として小細胞肺癌および悪性リンパ腫が考えられ血清中のNSEの上昇を認めた。腫瘍組織の免疫染色の結果、LCA(+), CD79a(+), L26(+), UCHL-1(-), CD3(+)でありB cell typeの悪性リンパ腫と診断された。NSE産生の悪性リンパ腫は稀であるが小細胞肺癌との鑑別が困難となるのが今回の症例にて示された。文献的考察を加えここに報告する。

68. 増大と自然退縮を示したBALTリンパ腫の1例

長崎大学第2内科

廣瀬弥幸、中富克己、鶴谷純司

中村洋一、早田 宏、岡三喜男

河野 茂

同 病院病理部

林徳眞吉

健保諫早病院内科

井上祐一、宮崎華子

77歳、男。平成11年右S⁵腫瘍影を指摘され、徐々に増大し平成13年には約5cmとなった。平成14年2月、確診目的で当科入院した。胸部CTでは右S⁵に約5cmの境界明瞭な腫瘍影と周囲にair-bronchogramを伴う浸潤影を認めた。TBLB標本では、大型のリンパ球が一様にみられ、免疫染色の結果、BALTリンパ腫と診断した。縮小傾向にあること、高齢であることを理由に積極的治療を希望しなかったため、このまま経過観察とした。当科で経験したリンパ腫症例を含めて報告する。

69. 中枢気道閉塞を来した腎癌肺転移症例の3例

福岡大学第2外科

柳澤 純、濱武大輔、平塚昌文

平山 伸、犬束浩二、白石武史

岩崎昭憲、川原克信、白日高歩

腎癌肺転移で多発性のものは難治性であり、インターフェロン以外の効果的薬剤も少なく、進行すると中枢気道閉塞を生じてくる。また、稀ではあるが、気道壁に転移し、そのために気道閉塞を来す事がある。演者が経験した最近の3例についてその臨床経過、治療内容を報告する。1例目は気管壁内転移が疑われた症例で気管形成術を施行した。2例目は気管内腫瘍に対し、レーザー焼灼術およびデュモンステント留置を施行。3例目はレーザー焼灼術で対応している。

70. 直腸癌術後18年目の肺転移切除の1例

鹿児島大学第1外科

柳 正和、小川洋樹、豊山博信

松本英彦、西島浩雄、愛甲 孝

症例は79歳の男性。18年前に直腸癌(ss, n-, P0, H0, M-, stage II)にてMile's手術の既往があった。左上葉